

第十話 山国を歩いた 頼山陽

(昭和30年2月20日掲載)



頼山陽は十三歳の時、既に詩を作り「いづくんぞ類を古人に得て千歳青史に列せん」と詠じたのですから、その才智の程が窺（うかが）われるではありませんか。

文穿政元年三月、三十九才の時、郷里広島を出発し九州に来り、久留米から筑後川を遡り、日田に来たのであります。同伴は弟子の川上東山です。隈町の富豪、山田子龍の邸に萬して、咸宜園の広瀬淡窓と交友したのであります。

十二月五日に隈町を発して、豆田を過ぎ、花月川に沿って一ノ瀬（市ノ瀬のこと）に来、上志川、龍を過ぎ、守

実に下り、花房橋で、山国川の本流に出会ったのであるが、この事を、「一水北より来るに遭う。蓋し源を彦山に発するものである。」と耶馬溪図巻記に書いて有ります。

それから日の本に来り、この旅籠三交軒の椽（えん）に腰掛けて、腰の弁当を紐といたのですが、朝陽橋（あさひなばし）から供立岩を望み、耶馬溪の奇巖に、最初の歓声をここで発した事でしょう。

東山と共に、茶店のじいさんに案内されて、この岩に登り、遙か西に英彦山を眺め、眼下に朝陽橋を見下ろし、清き山国川のえんえん蛇行する姿を、絶景（絶佳）と称したのであります。

二三町歩いて立ち止り、眼前に窓岩を見上げ、それから、峯に茂った老松は、見事な枝振りを示し連峰の奇巖は自然に面白く配置されているのに出会いました。山陽は「おお、之はさながら、仙人の遊ぶ姿じゃ、群仙峰、と名付けよう」と東山に言いました。

肥前屋から河を渡って庄屋村に出て、縦に渡って、一ッ戸に来たには、日は暮れてしまいました。このトンネルを図巻記に、

「山溪の相迫る処、山腹を穿(うが)ちて、道となし、又窓を開け、明かりを取ってあるが、予は松明(たいまつ)を求めて入り、窓の所まで行って、月が朗然として溪水にあるを眺めた」とあります。宮園村に来て、民家に宿泊しました。

翌日は霧が深かったので山陽は非常に残念に思いましたが仕方なく、霧の晴れるのを待って出発しました。樋川路を経て、沓掛(くつかけ)に渡って杉畑を、溪に沿って進んでいきますと、愈々(いよいよ)面白く感じられます。群峯は山国川を挟んで、そば立っていて、丁度、筍がによきによき立っているようですし、岩が苔むして紅葉、黄葉を植え緑の山が奇岩をなしている有様です。酔仙巖、机淵、机岩を始め山水の美を心行くまで味わった山陽は、柿坂に出て、一軒の茶店に立ち寄り店の前の河原に下りて見ると、石壁に激流が波打ち、仰ぐと幾百尺とも知れない高峯があります。

山陽は、

「耶馬溪山天下になし」

と叫び、東山に持たせた、腰の瓢箪を取り出して、一献傾けました。都合のよい事には一人の獵師が大きな猪をさげて通りかかったのを、宿の主人が呼び止めて肉をゆずって貰いました。蓆を敷くやら、にわかカマドで酒の燗をつけるやらして酒盛を始めました。

東山が元気よく飲んでいる最中を、山陽はほろ酔い気げんで岸まで下りて行きました。岸は緩やかに傾き、悠々と流れる水に対岸の風景は傾倒して移り、晩秋の黄葉紅葉は、天地の静寂と一致しています。頼山陽は、十三才の時の負けじ塊が勃々(ぼつぼつ 勢いよく起こり立つさま)として湧いてきました。そして、矢立の筆を取り出して、描写し始めました。

絵画の法も、山陽は修得しておったのでありますが、この擲筆峰(てきひっぽう)だけは嘆息して、

「絵画に表現しようとするればがい黄の筆法も之に叶わず詩文とすれば、王陽明も私淑し、個人の筆墨はみんな自分を欺いている様に疑われる」

と言いました。

その日の暮れ方、古城の正行寺に着き、翌日、雲萃上人は「まだ絶景をお見せしよう」と、青洞門と羅漢寺を案内しました。三日目に正行寺を辞去して、関門を通過して帰ったのであります。

耶馬溪をたたえた、見事な絵と長文の詩が名高い、山陽の「耶馬溪図巻記」で文政二年の冬雲萃上人に贈られたのであります。(完)